

- E： とにかく、よく本を信徒に配っておられましたね。
- F： 「心のシルクロード」という仏教との対話の本も配っていましたね。
- D： 内容が難しくてわからないので神父に質問したら、実に1時間半も説明してくれた。
- D： だいぶ前だが、要理学校で鎌倉の2階建てバスに乗る遠足の計画を立てた。 いつも山崎神父は同行するのだが、このときは都合がつかなかったけれど、どうしても参加すると言ってきかず、途中から待ち合わせをして参加された。 頑固な方でしたね。
- E： 写真がお好きだった。 同じ写真を何枚もくれた。 何で同じ写真を何枚もくれるのかと聞いたら、家族全員へとのこと。 ゆくゆく子どもは出ていくので、それぞれ記念に持っている為にくれるとのことでした。 それから、写真がお上手だったが、なかなかシャッターを押してくれないのには困った。
- G： ところで、何歳で神父になったのですか？
- E： 1957年に叙階されたはずなので、40歳になられてからだと思います。
- E： 旧国鉄に勤務しておられたときの流れで、国鉄カトリックの会の集まりに毎年参加しておられた。 これは今でも続いており、この教会からご婦人方が何人も楽しみにして毎年参加している。
- G： 私が壮年会の役員をしていた頃に、山崎神父に突然「このままこの教会にずっといられないか？」と聞かれた。 その話をサロンでHさんにしたら、Hさんも山崎神父に「若い神父が来たらどうされるのか？」と聞いたら、「隠居する」っておっしゃった由。
- E： 残念ながら教区にはまだ老齡神父の面倒をみると専門施設はない。 今、準備しようとしているが。
- G： そうだったのか。 山崎神父から聞かれたときには「なんていうことを言うんだ」と思ったが。
- J： しかしながら、病院に入ってそこで亡くなられるケースも多いし、難しい問題ですね。
- E： ところで、とにかく話の長い神父だった。 とっつかまったらたいへんだった。 一方では、「某映画館に行ったでしょう？」と言ってからかったらムキになって否定する一面もお持ちだった。 実は、この教会に来てまもなく、汚い格好したおっさんがサロンにいたので、誰か？と周囲の人に聞いたら神父さんですよ、って言われてびっくりした記憶がある。
- L： 教会委員会に対する山崎神父の対応はどうだったのですか？ 出席されると話が長くなっちゃうし、困ったと思うのですが。
- A： 迎えに行って、出席をお願いするのだけど、なかなか出てくれなかった。
- C： それから、女性が教会の運営に直接参画することを嫌がっておられたと思う。 何ですかね？ 最後まで山崎神父の面倒を見て下さった6人もの女性の方達からの素晴らしい追悼文を頂いた。
- L： 中和田のご婦人方から晩年は「可愛いおじいちゃん」と見られていたみたい。
- L： 山崎神父は、「信徒とその家族は自分の家族」と本当に考えてくれていた。 困りごとには親身になって相談に乗ってくれていろいろ世話をしてくれた。
- E： 山崎神父は酒はあまり飲まなかった？
- D： あまり飲まなかったようですね。 自分じゃ飲めないけれど、人には奨めていた。
- A： だけど、山崎神父の説教は長かったね。 あんなに説教が長い神父には出つくわさないよね。
- D： 実は、子どもたちが飽きちゃうので、説教の間に子どもたちは別室で初聖体の勉強をすることを提案してやらせてもらったことがある。
- C： 他教会の人から「山崎神父の説教は良い」と言われたことがある。
- M： 説教の結末は、「私にもわかりません」で終わることが多かった。
- D： やはり年齢と共にくどくなって来ていたのかな。
- L： 人前で怒ったことがありましたか？
- D： 私は1回だけあったことを記憶している。 ご復活の準備で「君たちは真面目に聞いていない」と叱られたことがある。 でも、それも今では懐かしい思い出。
- L： 日本ハムの新庄選手じゃないけれど、引き際をどういうふうと考えておられたのか。
- J： これからの教会はどうなるんですかね。 信者は減少傾向だし。
- C： お金もいろいろ必要ですし。 従来は山崎神父の恩給の恩恵に預かっていた面が多々ある。
- A： 山崎神父も、決して一大財産を持っておられたわけではないが、いろいろ大盤振る舞いもして頂き、財政面でもたいへん世話になった。 それから、ご自身は食事にも無頓着でしたね。料理を全部鍋にいで食されるので、用意した人がガッカリすることもある。
- L： 壮年会長だったころの話だが、懐というか、財布をいくつかお持ちだったが、その使い分けに無頓着だったかもしれない。



2006.5.21



山崎神父様略歴

1957年12月21日
 1958年2月～1960年4月
 1960年4月～1961年12月
 1961年12月～1963年9月
 1963年9月～1965年9月
 1965年9月～1967年11月
 1967年11月～1970年6月
 1970年6月～1982年2月
 1982年2月～1983年3月
 1983年4月～2003年3月
 2006年3月7日

司祭叙階
 末吉町教会 助任
 横須賀三笠教会 助任
 横須賀大津教会
 ファチマの聖母少年の町
 大和教会
 津久井教会 主任
 鹿島田教会 主任
 横浜小神学院 院長
 中和田教会 主任
 帰天





前 兆 ― 中和田教会の長い長い一日 ―

清水 聖

『平成 12 年 4 月 17 日午後 1 時頃、事務室にて聖週間の打ち合わせに信者の奉仕者が集まり相談中、ちつと歩行しようと思ったら、両足に力が入らず異常を感じた。午後 2 時 30 分頃、入院中の信者さんにご聖体を授けるべく、信者さん運転の車で出かける。汲沢の生協戸塚病院の玄関の一つひとつの石段がやっとの思いだった。約 20 分程で帰る。同行の信者の方の勧めで、立場医院（掛かりつけの病院）に行った。血液と尿の検査。数値は分からぬが、低い。「脳に異常があるといけないので頭の写真が必要だが、設備がないので他へ紹介しますから」と言われ、一週間分の薬をもらって帰った。午後 11 時頃、トイレのため目が覚めて起きたら、体の平均がとれずに倒れ、壁に頭をぶつけた。杖がないと歩けないと感じた。尿を漏らしてしまった。汚れたので風呂に入ろうとしたが、足が上からず時間がずいぶんかかった。汚れ物を洗濯機に入れた・・・』。

たまたま 18 日朝、家内が婦人会出席のため、小生の運転する車で教会に着く。婦人会会長より神父様の異常を知らされる。風呂場の水が出しっぱなしだったとか・・・。K 夫人、I 夫人、T さんに電話するも不在。神父様は舌がもつれ、手は小刻みにふるえている。

頭書の内容は、状況を把握するために小生が神父様から聞き出したことなのです。気は急くし、つらいことでした。立場医院に相談に行く。脳梗塞と判明。国立病院宛てに紹介状を書いていただく。婦人会の方に救急車を手配してもらい、小生同乗にて入院。立場医院の紹介状があるので入院手続きも簡単に出来ると思ったら大変。救急の時は一人作業では駄目で、最低二人は必要だと思った。感心したのは、小生が立場医院に相談中に、司教館に①聖香油は信者に受け取りに行かせる。②聖週間の夜ごミサが出来ない。③ご復活のごミサが出来ない。と、後のことを電話済みと聞き、さすがと思いました。とにかく、てんやわんやの一日で、時間がどの様に進んだか分かりませんでした。

平成 14 年 11 月 25 日、聖テレジア病院にご入院、療養生活に入られたが、平成 15 年 6 月 29 日「お知らせコーナー」で 7 月 1 日に退院予定と聞き胸をなでおろす。これからも神父様は大変なことと思います。

(H15 年 6 月 29 日記)

後日記：① H15 年 7 月 1 日より司教館別館に入居。

②神父様の財産を教区事務局長にお渡しする。

③膨大な図書を O さん、I さんのご協力で整理でき、事務局長に報告。



追 悼 文 ― 回想 ―

清水 聖

厳粛なうちに、司教様の山崎神父様に対する思いやりのある切々なるお話。止めどなく涙が流れました。司教様の語りに、一つひとつの出来事を思い出しました。

宮下神父様の後任として、1983 年（S52 年）に中和田教会に着任。神父様 66 歳、中和田での生活が始まりました。膨大な図書に囲まれ、兎に角近寄りがたい方、仙人みたいな方。カメラ技術はプロ級、モデルさんは数知れず。談笑がむずかしい方。私の評価が間違っていたらご免なさい。また、神父様はご婦人の教会運営参入をきらっているご様子。私、1989 年（H1 年）壮年会会長就任。神父様は、信徒のみなさんへの霊的指導、教会内のまとめに心を使っておられたご様子。しかし、ご復活、クリスマス、バザーなどのパーティーの折、みなさんと一緒に杯を傾けることが出来ぬ方。食物に香辛料は禁物。婦人会の方々のご苦労は大変であったと聞きました。私たち男性は、アルコールによる開放感を味わいますが、神父様にはそれが無い。心の処理が違うのでしょうか。なぜか神父様の懷に飛び込む姿勢が出来そうで出来ない悩み。

1992 年（H4 年）、神父様の要請で委員長に就任。1995 年（H7 年）、広報紙・204 号に拙文『テレビ機敷』が掲載された折、神父様から声がかかり、叱られるかと思ったら、無口の神父様から褒められ、「私も相撲が好きです」と言われてひと安心。なにか急に親近感を覚え、相撲のスクラップを次から次へとご覧にいました。相撲談義に花が咲き、ご鼻唄は寺尾と聞きました。相談事も教会運営のことについても神父様とお話が気軽に出来るようになりました。

教会の老朽化に伴い、新築の願望は無理なので、皆さんの協力で大幅な補修工事が始まりました。1995

その 2 ありがとうさん

私の家には気のやさしい弟がいる。なかなか気の強い跡取り息子であった。その本家には、なぜか長男が外に出されるしきたりがあって、先祖代々そうになっている。私には理由がわからない。それでも、父は埼玉県の大地主の農家の次男であった。母は、島根県の半農半漁の村の小学校の教師をしていたそう。だから、私は、自由気ままに家を出て、カトリック教会の神父になれた。弟は、母から説得されて土建屋の親方におさまった。よくも問題を起さずに承知してくれたものだ。

父も母も、きちんとカトリック教会には行ってくれた。それで、鎌倉市の墓地に墓を建てて、大きな、山崎家の（私に言わせれば、堂々たる）おくつき奥津城を設け、カトリック式の十字架も、両親と私と二人の妹のためのものも一緒に並べてくれた。すべての遺骨をまとめて（いずれは私の分骨も一緒に）、私たちの家のものはそこに納められ、弟のものも、考えに従って、一緒にまとめられた。北九州の若松の禅宗の楠博門、横浜のあたり鎌倉、その山崎一門を集めて、すべて今近くに、身近におさまる。

現代的考えによる、どの祈りに拠ろうとも、その言葉によって真心を込めて、心を合わせて冥福を祈ればよい。佛教もキリスト教も相違あるはずがない。弟も博門さんも、私も両親も、その心は、思いやりで一致していることが理解されるはずだ。善意さえあれば。思いやりの心があれば。

キリストの教えはどのようになっていようと、互いに信じ合えるなら、そこには平和があふれることになる。『十字架の愛』。

本当かしら。

(2002. 11)



座 談 会 山崎神父様の思い出（ヨゼフ会）

A：とにかくちょっと変わった方でしたね。取っ付きにくくて。

だいぶ前の話だが、月に一回上大岡のセンターで勉強会があった。もうガタガタだから止めたほうがいい、と言っても止めないので車で送って行った。あるとき、コンビニのトイレに入ったけれど出てこない。同行しているご婦人の K さんが心配してトイレを覗いたらすごく怒られた。上大岡でもまたトイレ。あのときは、お祈りどころではなかったはず。それから、さすがに行くとはおっしゃらなくなったが。

B：ご当人もつらかったでしょうね。

A：鎌倉の聖テレジアのときは落ち着いておられた。聖マリアンヌに入ったときは長かったね。司教様がお見舞いに来て下さった。普段は手すりにつかまって歩いているのに、司教様の前では、シャキッとて杖もなしに歩いた。意地っ張りだったのかな。

B：気力ってすごいですね。

A：山崎神父の物凄い量の本を処分する仕事を担当したが、悪いことをしちゃったかとちょっと気が咎める。

C：そんなことはないですよ。むしろ、天国から感謝していますよ。

A：中和田に赴任して来られたときは殆ど手ぶらだったが、すぐその後に、前の教会からトラック一台分の本が送りつけられて来た。

D：見ないんだったら処分したらと言ったら、「いつかは見る」とおっしゃって決して捨てなかった。

A：専門の本屋が見に来たので、高く売れると期待していたのだが、全然。やっぱり専門家の目は違うんだな。

B：私は封を切らないままの落語の CD を買った。

E：私もクラシックの CD を買ったが中身が入っていない。これが本当のカラヤン？！

F：私は山崎神父と同郷だった。あるとき山崎神父が目の前をさっさと歩いて行かれた。そのときは岡津のお寺の住職に会いに行かれるときだった。それがきっかけで、一遍上人の研究者である遊行寺の住職に紹介も兼ねて、一緒に会いにいった。そこで丁重な出迎えと歓待を受けて、山崎神父が非常に喜んでおられた。非常にハイになっておられたことを覚えている。

E：なかなか仏教の研究をしておられたようですね。

F：歎異抄を家内が貸したこともあった。返してくれなくて、あとで買い戻したが。

G：仏教の話が出たが、トルストイの研究も熱心にされていて、よく研究家の方（注：北御門二郎氏）の冊子を配っていた。トルストイの思想に共鳴しておられたのですね。思想というか、考え方の幅が広い方だった。





どうしたらよいか

山崎 正俊

生活保護を受けている或る家庭の子が、中学の卒業記念アルバム代として、或る人からお金をいただくと、それを聞いた福祉事務所の職員から処置費を差し引くと言われ、そのアルバムをあきらめねばならないということがあったが、これは二十何年か以前の出来事で、今ではそのようなことは決してないことだそう。

あの頃も、ほとんどの人は呪いの声をあげて、お役所仕事の冷たさを非難したものだった。けれども権力の座に近い人たちは、その立場を守るためにはどうしても法的な慣習によって行わなければならない、そのような法は改めるべきだと言う者を、法的秩序を乱す不逞のヤカラときめつけて、「法治国なのだから、法に従うことこそが正義に叶っている」という信念に燃えていた。

情に動かされているは、たしかに切りがつかなくなる。公務の場合には、どこかに線を引かねばならない。公的な扶助を受けられる者と、受けられない者との境には、人間的判断が入り込むのだから、不都合なところがありはするが、これはどうにもならぬことで、問題は扶助を欲しがる人の、自分さえ受けられるなら、それで良いというような利己心によっておこされることだと、思うことにするのだそう。

いま、同じこの地に住んで生活しているその人が、まったく別の世界の人であるように見えることがある。その人たちが、私の知らないものへの関心や好奇心を示し、そのような生きる目標を持っており、その心を開いてくれることもないままに、また遠くの地に離れてゆくようだから。

私にとって正しいと信じられることが、いつもすべて、まことに正しいとも限らないので、他の人が私と違っているからといっても、そのほうがより正しい場合だってあり得るわけだが、それでも妥協できない点が残るので、そのままで、私は一私が正しいと信ずるもの」を守り続けることより他の生き方が、いまはできないとしたらどうか。ちがっていても、その善意をたよりにする他に何ができるか。そうすれば法をたてにとったりなどしていかがみ合うこともなく、それぞれの道をあゆみながら、補いあい支えあってゆけるだろうではないか。でも、法だけをたよりにして行動する役目でありながら、その時、その法には従うことしかできない立場の人は、その場では困るだけだろう。その法が実はよくなくて、まもなく改められるだろうことを期待しても、自分ではすぐにはどうにもならないのだから。

それでも、どんなにすぐれた法ができて、それには限界があることは、法を定める人にはわかっていても、法を定めてそれに従わせてみなければ、その法の良し悪しはまことのところわからないほうが多いのだから、あらゆるおこないの正しさには限界があることを認めて、あらゆるおこないの基には、「愛」がなければ、思いやり深さがなければ、騒がしさと煩わしさをまきちらすだけだというような意味の聖書の言葉をよりどころにしなければならないのだろうか。

それでも、言うことと思うこと、実際におこなっていることなどの間に、あまりにも大きな相違があるのは、どうしたわけか。その日常の生活のわずらわしさからは、できれば抜け出したいので、その重荷になり、役にもたたないと思われるようなことから、なんとかして遠のき、知らないふりをしてもよいというものでもあるまい。

(1983. 5)



その1 弟よありがとう

山崎 正俊

私の祖先には気のやさしい人がいて、その子はなかなか気の強い跡取息子であったそう。その本家筋には、何人かの乱暴者がいて、親戚中が「先が思いやられる」と心配して、「あいつには後がまかせられぬ」ということに話がまとまり、村八分になった。

私たち幼い者たちには詳しいことは知らされないままに、遠くの方から養子がもらわれてきたのだそう。なんとか話がついたらしく、私がものごころついた時には、何だかわけがわからなくなっていた。だから今は、近くには親しい人々はなく、金持ちだったから、財産分けはあっても、新しい土地でイノチをつないでいるだけ。

近くには血のつながりはなく、その働きによってイノチをつないでおれるだけ。

年～1997年にかけての屋根、窓廻り、床、天井など、当時の広報を参照ください。神父様の財務への援助は感謝のひと言に尽きると思います。信仰を通じての繋がりは勿論ですが、相撲が結ぶご縁がよかったのではないのでしょうか。

雨漏りのない教会になりましたが、こんどは、神父様で自身が次から次へと故障が続き、みなさんと心を痛めました。私の未発表の原稿「前兆〈中和田教会の長い長い一日〉」(H15. 6. 29)も併せて読んでくだされば幸いです。信徒の皆さんの神父様に対する心配、私たちの教会に対する不安……。苦勞しましたね。しかしながら、教区の歴代の事務局長の神父様方の計らいで、大勢の神父様にお出でいただき、ごミサを受けられたことは幸いでした。

2003年(H15. 7. 1)より司教館別館でのご生活が始まりましたが、Hさんはじめ介護チームの方々の24時間態勢、感謝申し上げます。永い期間ありがとうございました。

お相撲好きな神父様

3月12日(日)から大相撲が始まりました

天国でくつろいで優勝の行方を占って観戦してください (H18. 3. 13記)



テレビ 棧敷

清水 聖

「ハッキョイ」「ノコッタ」「ノコッタ」。台所の家内から「ちょっとボリュームが高いわよ」と声がかかる。いよいよ夏場所の幕開き。まばらな客席を尻目に、若い力士がぶつかり合い、お互いに死力を尽くしている姿。小生は一端(いっぱし)の通ぶって其の辺の取り組みを見るのが楽しみである。其の中から将来の横綱、大関が生まれてくるのです。9度目の優勝を目指す曙、貴乃花の両横綱に武蔵丸など3大関がどう絡むか、大関昇進がかかる安芸乃島の存在、先場所全休の武双山、琴錦の復帰も優勝争いを面白くしそうだ。しかしながら土俵に目を向けてみると、最近は攻防のある相撲が少なくなってきた感じ。技能賞が4場所続けて該当者なしということは、そのひとつの現われではないのでしょうか。すなわち、小兵力士の舞の海、智ノ花、旭道山、寺尾などの活躍に期待をします。

そもそも相撲に興味を持つようになったのは、小学生低学年の時、体操の時間に校庭の砂場でよく相撲をとられ、当時名大関と云われた清水川が活躍していました。小生苗字が清水。クラスの皆に清水川頑張れの声援を沢山貰ったのが始まり。

戦前、戦後を通じ、何度か本場所に出かける機会に恵まれました。昭和天皇の相撲見物(天覧相撲)には2回出会い、蔵前最後の場所には感激した記憶があります。平成元年、九州場所11日目から485日間も満員御礼が続き、隆盛を誇っています。ちなみに、私共夫婦はその満員御礼の記録に参加したこともあります。第一線をリタイアし、今はやりの在宅勤務となり、我が家のマス席四畳半、両国国技館より広いです。スクラップした番組表に赤のボールペンにて勝力士のシコ名に○印をつけています。幕の内20番あり、残り10番ころに家内がビールとおつまみをしたり顔にて出前してきます。小生のテレビ観戦に引きずられて、近頃は家内も相撲に興味を持つようになりました。取組の予想、個々の力士の将来性まで一角(ひとかど)の評論家に負けない迷(めい)解説をする時もあります。今場所は、大方の予想通り、曙、貴乃花の千秋楽対決となりました。本場所観戦の魅力に誘われますが、我が家のマス席テレビ棧敷の観戦の醍醐味は格別と思います。

(平成7年5月25日 記)



敬老の日に 1997.09.14



山崎神父様 ありがとう

阿部 映子

山崎神父様が昨年の中和田教会のバザーにいらした時のことです。皆様が代わる代わる神父様に話しかけ、私もご挨拶し、立ち去ろうとした時です。「阿部さん・・・」と小さな声で呼びかけられました。びっくりして、「神父様、何とおっしゃいました？」と何うと、「阿部さん、もう来なくてもいいよ」とはつきりと話されたのです。側におられた付き添いの本田さんも、「阿部さんが分かったのね」と驚き、私が「なぜですか？」と問うと、「あなたはお調子のいい事を言うから」と意味不明なことをおっしゃいました。その後3回伺っていますが、まるっきりお声を出されませんでした。先日も本田さんと「不思議よね。どういう事だったのかしら」と話したのですが・・・。

山崎神父様と私との関わりは、2002年に位田さんが入院され、今までなさっていらした病院通院の役目を教会委員が引き受けることになり、私が担当することになったのに始まります。もちろん、私一人の力では出来ません。花坂委員長はお勤め中でしたので、清水前委員長、お食事担当の方や婦人会の方々の協力あつての仕事でした。

初めは、立場医院への月2、3回の通院と、1ヶ月1回程度の眼科の通院の付き添いでした。待ち時間が長いと神父様と二人きり、何を話してよいか戸惑ったものでした。しかし、慣れてくると、神父様の思ひ出話を聞くことが多くなり、神父様の神様に対する思いがとてもやさしく、自然に受け止めておられるのが分かりました。

これより先の2000年に国立病院に入院された時、ひとりで4時頃お見舞いに行ったことがありました。その頃は副委員長として接していましたが、私事でお話することはありませんでした。その日は神父様の質問に答えるように色々とお話しているうちに辺りが薄暗くなり、もう帰ろうとした時、神父様に「この病院の窓から見える夕暮れがとてもきれいだから見ていらっしゃい」と言われ、帰るに帰れずそのままおりました。日が沈んで少し赤みがかった灰色の空になった時のなんとも言えない静かな落ち着いた情景・・・。「夕暮れをじっくりと見たことなどなかったような気がします」と申し上げると、「これを見るために病院にいるのもいいものだよ。神様って大きいね」とおっしゃられたこと忘れません。神父様に親しさを感じた瞬間です。それ以来、お互いに色々とお話しをするようになりました。

そんなある日、ヘルニアの手術をしたいので、聖マリアンナ病院に入院したいと言ひ出されました。鹿島田教会にいらした時の信者さんで院長の前田先生に頼んで欲しいとのこと。すぐ林神父様（司教付事務局長）に確認をとり、前田先生に電話をしました。快くお引き受けくださり、2002年6月22日に入院、手術され、無事退院されました。また、神父様がミサ司式が出来なくなつてからの代わりの神父様をお頼みするのが一苦勞でした。もちろん林神父様にコンタクトをお願いするのですが、決まるまでやきもきして待つておりました。鵜飼神父様、上杉神父様、上原神父様、森田神父様、山口神父様、林神父様、カンペン神父様などなど、大変お世話になりました。

その後、10月に、今度は白内障の手術をしたいとのことで、また聖マリアンナ西部病院へ。その時のエピソード・・・。

神父様は、どうしてもローマンカラーを着けていくとおっしゃいます。言い出したら人の言うことは聞かれませんが、仕方ありません。車椅子にお乗せして出かけました。病院の中が暑かつたため神父様は作務衣を脱がれました。人の目が気になる私は、大きな声で「神父様」「神父様」と連呼して、自分の父親でないことを知らせようと必死でした。付き添いのお二人の方と後で大笑いしたことが懐かしく思い出されます。

手術は11月末と予約を取つたのですが、11月23日に再び倒れられ、病院で脳梗塞が別の場所で起こっている模様と診断され、夜おひとりにするのは危険という判断があり、前田先生にご相談いたしました。先生は「もう、あなた方で面倒を見るのは限界だろう」とおっしゃり、入院させた方がよいということになりました。どこの病院にしましょうかとおっしゃられたので、「聖テレジアは？」と何うと、理事長をしておられる病院とのこと。すぐ、引き受けるとのご返事をいただきました。早速林神父様に連絡。林神父様も前田先生をご存知でいらして、「お任せなさい」とのご返事に、ほつとしたのを憶えています。しかし、すぐに前田先生からお電話があり、「今日午後、入院しなさい」と言われ、教会の食事係りの方に手伝っていただき、書類やら、入院用荷物、車の手配と大騒ぎでした。神父様は、何がなんだか分からないうちに入院となり、申し訳けなかつたと思つております。でも、あれ以上の方法があつたかどうか、今でも時々思い悩みます。殊に、入院されてからは精神不安定になられ、弱音をはかれることがありました。



挨拶

山崎 正俊

はじめて中和田教会の建物を見たのは、献堂式の日からいくらかもたっていませんでした。式の当日に来れなかつたので、日を改めてお祝いのつもりでの訪問だったわけです。

そのときの主任司祭だつた木村神父様が、関口の小神学校（コンクリートの一階部分だけを残して戦争で全焼し、戦後に再建され、いまでは東京大司教館になっている建物）に在学しておられたとき、兵隊から帰つて鉄道員として復職していた私は、同じ建物のなかにある中神学校に、神学生として入学しました。一年半ほどで再召集されたのですが、その頃からの顔見知りでした。

十数年あとで、私は小田原教会で司祭に叙階されると、卒業式を待たずに末吉町教会に赴任するのですが、その主任司祭は、宮下神父様でした。木村神父様は、その三か月あとに甲府教会で司祭に叙階されたはずです。

そのあとの記憶は、あまりたしかではありません。自分の教会でのことしか関心がなかつたのでしよう。それでも、横須賀から箱根、そこで眼を悪くして戸塚教会に移り、二つの聖堂を建てる責任を果たしてから末吉町へ。河野神父様が亡くなられたので、逗子の聖マリア小学校長や教区の小神学院の責任を持たされ、由比が浜の教会に住んでおられるぐらいしか思い出せません。

今は七里が浜の聖テレジア病院付きということになられた宮下神父様は、横須賀の三笠教会、静岡の八幡教会を経て、この中和田教会の主任司祭として過ごされるのですが、六十才にもなっているのに、靈的にすばらしい進歩があつたと、三笠教会の人たちが言い、私もその年齢で遠くの新しい土地に、すすんで責任を負われたという、その誠実さと思ひやりに感嘆したものです。

私の司祭としての始めの三年間ほどを、この神父様と共に働かしていただき、こんどはこの神父様の引退のあとを受けるということは、私の父が埼玉県長井村の出身だということもあつて、何かの因縁めいたものを感じもします。

数年前に宮下神父様の引退の話があつた頃、それは教区の司教の交代のことで、さきおくりになされました。そのときの予感が當つたのか、このたび、私がその後を受けさせられたわけですが、それがよい結果を生むようにと、皆様の御祈りと御協力をお願いする次第です。

(1983. 4)



中和田教会赴任当時 1983. 10. 13



集会室落成記念



1985. 2. 24

広報巻頭言に見る山崎神父様の思い出

広報委員 岩 渕 英 介



長い間広報委員及びそのお手伝いをやらせて頂いたことから、山崎神父様の広報巻頭言の原稿は誰よりも早く見ることができるという特権(?)を享受させて頂きました。(広報 190 号～285 号)

いつもきちんきちんと原稿を下さいました。原稿用紙にきっちりと規定の文字数で収めて、修正するときも字数オーバーしないように字句を選び、一件おおらかでおおざっぱなように見えながら実に几帳面な一面もお持ちでした。

原稿が遅れかけたのは二回だけありました。

一度は、色々お忙しくて筆が進まず、締め切り間際になってしまった時です。発行を一週間延期しようかと思っていたところに、拙宅の玄関のチャイムが鳴り、神父様が原稿を持って立っていらっしゃいました。勿論いつものジーンパン姿です。歩いていらっしゃったそうで、「教会から随分かかりますね」とおっしゃっていたのが懐かしく思い出されます。

二度目は、脚立から落ちて入院された時のことで、この時はお見舞いに伺いましたらおみやげに原稿を頂きました。調子の悪い時でも気にかけて頂き、感激致しました。

ご自分の文章には強い思い入れをお持ちで、後に『ひろまち抄』や『なかわだ抄』のようにまとめる時のことも考慮されていました。広報は、文集にまとめる時の原稿としても扱うため、タイプミスがあっても意味が通じなくなったりするのを大変気にされていたいらっしゃいました。時々タイプミスがあると(結構読みにくい原稿でもありましたので、ミスとも言えなかったかもしれませんが)、意味が違ってしまうこともあり、そんな時は聖堂に置いてある 100 部を超える広報誌を一枚一枚ボールペンでお直しになっていたいらっしゃったこともありました。後でそのことに気づき、冷や汗をたらしながらお詫びしましたが、それ以来広報巻頭言は気合いを入れて、絶対にタイプミスしないように気をつけたものです。

しかし、多彩なテーマの名文も多かったのですが、晩年には文章も複雑化し、理解しにくくなってきたようにも思います。文章の確認のために伺ったところ色々なお話しに発展し、一時間以上にもなった時もありました。(このような思い出をお持ちの方も多数いらっしゃると思いますが。)

中和田教会に赴任されて以来、多くの文章をお書きになりましたが、懐かしい思い出となる三つの文章を御紹介します。

赴任早々の 1983 年 4 月、5 月の『挨拶』と『どうしたらよいか』、それから最後のご投稿となった 2002 年 12 月の『その 1 弟よありがとう、その 2 ありがとうさん』です。

『挨拶』はそれまでのご活動や宮下神父様との係わり等が紹介されています。

『どうしたらよいか』には山崎神父様の基調的なお考えともなっている権力への批判と弱者への思いやりが込められています。

これらの文章は、後年のものに比べ非常に平易な文章になっています。

『ありがとうさん』は中和田教会の広報にご投稿された最後の文章です。神父様をよく御存知の方からは、「家族関係で多くの葛藤を抱えておられた神父様が、生涯の終わり近くになって、すべてが平和に導かれ、感謝しながら安心して過ごされた様子が拝見して分かる」とのお話しも頂いているものです。

神父様の広報へのご投稿の標題を時代順に並べて見てみました。博識な山崎神父様だけあって、カトリックの司祭でありながら仏教論があったり、扱う範囲も多彩で、柔軟なお考えだったように思います。育った時代背景やお歳から考えると非常にリベラルな思想で、既成概念や権力への鋭い批判精神にも富んでいたことが分かります。

神父様、天国へ原稿用紙を持って行かれましたよね・・・



一度、神父様がお父様の話をされたことがありました。お父様は国鉄のトンネル作業技師で、現場監督をしていらしたそうです。ほとんど留守がちで、帰ってくる時は沢山のお土産を持って来られたそうです。神父様にとっては尊敬すべき、子ども思いのお父様。でも、ちょっと強い存在だったようです。そのお父様が年老いて認知症になられ、神父様の腕に抱かれて亡くなられたそうです。「その時の姿を思い出すと、あの立派な、いつも輝いていた父親が自分に甘えている。悲しくて、悲しくて・・・」と泣かれたのを憶えています。私も涙しました。「死ぬということは大変だね。これからどうなるのかなあ」とおっしゃったような記憶もあります。

聖テレジア病院での神父様が、私にとってはいちばん辛い時期でした。これでよかったのかという自問自答の日々でした。でも、神父様は、私が顔を出すとほっとなさるらしく、色々な要求を出されました。そのことで許していただけるのではないかと感じております。

この病院の待合室で、林神父様と担当医との話し合いをするために、3 時間余り待たなければならなかった時がありました。偶然手に取った絵本『アッシジの光』(葉祥明)の中の詩に目が止まり、自然に涙があふれ、私は神様に守られてここまで歩いてきたということを実感しました。そのときの詩を書いて、神父様とのお別れにしたいと思います。

この世であなたが会える人々は、
すべて神のみ使いです。
あなたの助けを必要としている人も、
あなたを苦しめ、批判し、痛めつける人も、
また神の使者です。
かれらは、あなたから愛を引き出し、
神の元に運んでくれるのです。



神父様、ほんとうに有り難うございました。また天国で・・・。

山崎神父様に捧ぐ

丸 田 綾 子



この度の思いもよらぬ山崎神父様のご帰天、今も夢をみているような気がして居ります。信じたくないのです。

先月 22 日、お仲間と一緒に病院へお見舞いに伺った時、何もお言葉はなく、静かにまどろんでいらっしゃるお顔色もよく、とても安らかにしていられるので、春にでもなればきっとお元気になられることと信じて、おいとまして来ましたが・・・この度のご帰天、なんとも残念でなりません。

神父様は大正 6 年 12 月のお生まれで、いつも教会でお誕生祝いをしてきましたが、出生届が翌年 2 月 6 日頃となっておられる為、7 年 2 月 5 日生まれの私のことを「お姉様」と言われ、私は「いいえ、神父様がお兄様ですよ」といつも言い合いを楽しんでおりました。

山手に引き上げられてからは、ただただ静かに過ごされ、時折お訪ねしてもじっと見つめられるだけで、一言も伺うことは出来ませんでした。すっかり別天地に住まわれ、幼児のように純真そのもののようなお顔が忘れられません。お元気な頃、お話し好きな神父様に捉まると延々小一時間もお話がつづき、早くおいとましてくてじりじりしながらも、つい引き込まれてお相手をしていたことも何度かあって、今はそれになつかしく偲ばれます。

また、神父様は大変な読書家で、その沢山なご蔵書を中和田に残して行かれましたが、係りの方々のご奉仕で整理され、お庭の片隅に山崎図書館とでも云うべき小さな建物も出来て、何よりのお形見となりました。

どうか山崎神父様、天国で安らかにお憩いになり、中和田教会の上を何卒お守り下さいませ。合掌。

最後までお世話下さった 6 名の女性の方々

山崎神父様との出会い

マリアヨハンナ 本田 結子

神父様とはテレジア病院のベッドの上でお会いしたのが最初でした。パウロの言葉に『私はキリストのためならば、弱さと侮辱と危機と迫害と息づまりに甘んじよう。なぜなら弱い時にこそ私は強いからである。』

神父様は私に自分の身を持ってこの言葉を示して下さいました。それは私にとってキリスト出会でした。そしてそれは幸せなときでした。



浦越 文江

山崎神父様のお元気な頃は 2 人でいつも漫才をやっていました。目と目が合っただけでおかしくて大笑いしたり、けっこう私はからかわれていました。

楽しい思い出がいっぱいで私の一生の宝物ができました。そして祈る事の大切さも教えていただきました。本当に有がとうございました。私なりに祈り続けて行こうと思っています。



宮本 寿子

喜んで召し上がっていただきたい思いで毎年お届けしていたおせち料理。今年も神父様はおいしそうに召し上がって下さいました。

その後わずか 1 ヶ月で何も召し上がれなくなるなどとは夢にも思わずに....

あの時の神父様の笑顔が今の心に焼きついています。

今年私はおせち料理を作る事が出来るでしょうか。



岸 英子

本当に忍耐強く、私の拙い介護を受け入れて下さった神父様に、“神父様は本当に忍耐強い素晴らしい神父様ですね”とお声かけすると、まるで『なに言っとるか』と言わんばかりに照れかくしにお口を思いつきりへの字にしておどけていらっしゃいました。

そんな神父様が大好きでした。



青山 礼子

山崎神父様に初めてお会いしたのは今年の 12 月の中頃、本格的に 1 月からお世話させていただき、遅番が多かった私は、夕食を共にさせていただき、その間にも神父様の優しさを折にふれる事ができ、生きる勇気を益々与えて下さいました。2 月からは病院生活でしたが、いつも穏やかな神父様に教えられる事が沢山ありました。2 ヶ月という短い時間でしたが、とても感謝の気持ちでいっぱいです。

谷口 美奈

『今日の入浴剤はどこにしますか？別府？草津？』別館のお風呂ではありましたが、週三回の入浴をとっても楽しみにされていました。

入るまでは「面倒だ！」なんて言っている、ひとたび入ってしまうと、歌がでたり、冗談がでたり、私たちを楽しませて下さいました。

出た後は、リビングで気持ち良さそうに、うとうとされているお姿が忘れられません。



部屋の中は髪を刈る鋏みの音とガスストーブの炎が燃える音だけが聞こえていた。

その後さらに体調を崩されて鎌倉の聖テレジア病院に入院されていた頃と、“終の棲家”となった山手の司教館別館に移られた時期に家内と何度かお見舞いに伺った際、その都度きれいに整髪されているのを拝見して安心したのと同時に何故かうれしかった。

神父様が帰天された後の欠みは大切な形見となった。そしてそれを自身の散髪に使用させて頂いている。耳の周りと後ろの毛繕いは家内に頼んでいるが、晩年の神父様と同様に櫛の滑りはよく毛を引っ張られることはないが、時に突付かれたり、挟まれたりはする。そのつど「痛ッ！」と発するが「あらそーお だったら動かないで！」と謝らない。今の中国と同じである。

しかし自身の散髪のとときにこの痛みを通して感じることは、神父様はよく我慢して下さいました。心からのお詫びと感謝の思いがより強くなって行くことである。



山崎神父様との思い出

上野 明子



昨年 12 月 4 日（日）、介護の方々のお心尽くしにより、山崎神父様のお誕生日を祝っての中和田教会でのミサとパーティの日曜日が、神父様にお目にかかれた最後の日になってしまいました。

ストライプをつけられ、車椅子で目を閉じていらっしゃいましたが、若き高野神父とお二人でのミサに、私達は心を合わせ静かに神父様の晩年のお幸せを祈ることができました。

祭壇壇上のお二人を見上げるたびに「ああ、神父様は高野神父のような活動的な若い日々から、長い道のりを教会を守り、信者達の為に勤めて来られたのだ」と感慨深く、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

当教会で二十年、息子達は侍者のお手伝いをさせて頂いた小学生時代から早や三十歳代。

虚飾を嫌い、ちょっぴりガンコなところもあった？芸術家風慈父、そんな雰囲気は私の父に似ていたので、息子達も「お祖父ちゃんみたいだね」と通夜にかけつけなくなる気持ちにさせられる方でした。私も遠慮のないことを申し上げたこともありましたが、神父様は穏やかに受けとめて下さいました。

平成 15 年 12 月 2 日、どんよりと曇った日曜日の午後、小野さんの車をわずらわせ、町田、八乙女さん達と 4 名で聖テレジア病院へお見舞に伺いましたところ、人気のない廊下の談話コーナーで、ペンギンのぬいぐるみをじっと見つめ、小声で歌を口ずさんでおられる独りぼっちの寂し気な神父様の後姿が見えました。

突然の賑やかな来訪者達（特に私）は、元気づけたい一心で神父様の戦争体験やら、チャップリンの映画を女学生時代、劇にして演じたことや、矢継ぎ早に話し、歌いました。

「華摘む野辺に陽は落ちて... みんなで肩を組みながら歌をうたった...」 だんだん目覚めていらしたようでした。

神父様の祭服を取り去り、青年時代に戻ってしまったような型破りのお見舞でしたが、一人のおじいさんとしての追憶も赦されるのではないかと思います。

その後、シスターの要請で、第二水の午後のミサに神父様他信者さん達をお聖堂へお連れして様子を見る、という楽しいボランティアに石川さん、石井さん達と何うことになりました。

我が教会での諸々のお世話をなさった方々、山手での介護の方々のお苦勞にはとても及ばない気のきかない私のボランティアでしたが、一助になれたなら嬉しいことでした。また、御葬儀の帰りに立ち寄らせて頂いたお住居には、神父様を慕われた多くの方々のお写真や手製の作品が所狭しと飾られ、その中に私の“聖誕の聖家族”を描いた小さい絵も大切にさせて頂いて感激でございました。

折にふれ御遺影に向かつては、「神父様、天国で武田恭さんのハーモニカに合わせて唄って下さいね」と語りかけ、忍ばせていただいております。

では、再会の日まで 合掌

（平成 18 年 4 月 14 日）



散 髪

石井 三雄

「終わりました」「・・・」後ろから顔を覗き込むと転寝（うたたね）のご様子。「神父さま！終わりました」少し大きな声で呼びかけた。「ああ どうも有り難うございました」。晩年の神父様は散髪の最中に転寝をすることが多くなった。

私の場合整髪でも理髪でもない自己流で始めたものだ。アルジェリアのハッシルメル（サハラ砂漠の入口となる辺り）でプラント建設の監理に凡そ2年ほど赴任したときに自分で髪を切ったのが始まりだった。それは日本に帰国してからも続いているが、かれこれ30年になる。

山崎神父様が中和田にこられて半月ほどして、神父様は床屋がどうも苦手のだと会話の中で感じた。「よろしかったら私が髪を刈りましょうか？」「そりゃぁ助かる。おねがいます」二つ返事だった。その頃は子供室（なき部屋）に新聞紙を1.5メートル角ほどに敷き、その上に食堂で使用している椅子を中央に置き、毛繕（けづくろ）いの毛が入り込まないようにナイロン製のカバーで体を覆った。ここまではなんとなく理髪が始まるような雰囲気はあったが、髪を刈り始めると鋏（はさみ）は神父様の頭皮を突付き、あの特徴のある大きな耳たぶを挟み、髪の手を引っ張り、その度に「あぁ失礼しました」「痛かったですか」と謝るが、神父様は「いゑ いゑ」と意に介していない様子だった。あるとき散髪が終わって帰り支度をしていると、「妹からこれをプレゼントされてね」ときれいな箱を手渡された。中にはカット用と梳（す）き用の理容鋏がセットで入っていた。共に“周作”と銘が刻んである。自分が当時使っているものよりはるかに高級な鋏だった。「どうぞこれを使ってください」今迄の失礼は腕のせい、鋏のせい、自分では判っているだけにそれを見て心中複雑な思いがした。しかしこの鋏に変えてから失礼の回数は減少したように思う。

散髪はひと月からひと月半ぐらいの間隔だった。曜日と時間によって大相撲や野球のナイター中継を見ながらの時期もあった。また家内が同行した時は、終わってからお茶を飲みながら話が弾み、楽しい時間を過ごさせて頂いた。既にこの頃から“神父様の散髪”は自身の生活サイクルの一部になっていた。

散髪を通して最も印象に残っている事がある。新集会室建設にあたって建設費の話を自ら語られたときの事だ。「私は今何もしないのに恩給と年金がどんどん溜まっていくんですよ。だからこれを建設資金に使いたいんです」。このお陰で中和田の信徒は経済的な負担をどれほど軽減できただろうか。この集会室建設に当たって神父様の希望が唯一あった。「この部屋はこちら側に本棚を、反対側は押入れにしましょう」と明確に指示された。そのときに感じたのは、（これは決して言葉にはされなかったが）中和田の信徒と共に余生を送ることを希望されていたのだと思う。

主の御計いを推し量る事は決して出来ないが、神父様が中和田に残された有形、無形の行跡を通して「真に清貧で謙遜な神父様」でしたと衷心より表明出来る。

体調を崩される半年ぐらい前の頃だった、散髪中に「もう20年になりますねー」といわれた。「何がですか？」と聞き返すと、「いや 最初に髪の手を刈っていただいてから」。言われてみて、かなり前から髪の手が白くまた櫛の通りも良くなっている事を実感していたが、もう20年になっていたとは全く思いもしなかった。「そうですか、もうそんなになりますか」と相槌を打つとたんに目頭が熱くなった。神父様も何となく眼を瞬たかせている。会話が途切れた



レジオ・マリエにおける《山崎神父様語録》

岩崎 好愛

昭和54年(1979年)に洗礼を受けてすぐ、「勉強のために」とお誘いを受けてレジオ・マリエのメンバーに加えていただき、ずっと現在に至るまで会員として毎週金曜日の集会に参加してきました。指導司祭は、当時の宮下神父様から山崎神父様、グルニエ神父様と引き継がれ、現在は高野神父様が時間のある限り来てくださっています。

この度主のもとにお帰りになった山崎神父様は、マリア様に対する尊敬のお心が強く、また祈りを大切にするレジオ・マリエの精神を心から支持されて、毎週のアロクチオ（講話）では沢山の心に残るお話をしてくださいました。ベッドに就かれることが多くなった時期にも、集会には顔を出され、声にはお出しにならなくてもロザリオを熱心に繰っておられました。お茶の時間になると、お話し好きの神父様は、時には嬉しそうに、時には悲しそうに、いろいろとお話しが尽きませんでした。

毎回のアロクチオの個人メモの中からいくつかを皆様にも分かち合わせていただきながら、思い出とともに、さらに深く山崎神父様のお教えを心に刻みたいと思います。

＊その1＊ 「すべての恩恵の取り次ぎ者マリア」という考え方を否定する人もありますが、そのような考え方は結局マリア様を消してしまうことになります。教会は、救い主としてのキリストが中心であるのは確かですが、マリア様の協力のことを考えからはずすことはできません。レジオ・マリエは、この“救いのみ業への協力者としてのマリア様”に倣うことを心に留めます。

＊その2＊ 信徒としてみ国のために働きたいと思うなら、神様の前に心を開く必要があります。そのためには祈りが必要です。祈りによって初めて神様の前に心を開き、霊的にもものを考えることが出来るようになります。

＊その3＊ 「開かれた教会」という時も、祈りの軽視にならないようにしなければなりません。祈ることによって恵みを受け易くなり、行いの意味も違ってきます。祈りに基づいた働きがよい効果をもたらさないはずがありません。祈りと行いの一致がなければなりません。

＊その4＊ 使徒パウロは、ローマ人への手紙の中で、この世の悪い習慣に妥協することのないようにと言っています。時には社会のワクを越えることもあるでしょうが、それと戦って生きていくのが妥協しない生き方です。

＊その5＊ 純粋な霊的支えがどんなに人を勇気づけるものであるかを考えるなら、社会的に具体的なことをしなくても引け目を感じることはありません。最近、社会的活動に奔走するあまり、祈りがそっちのけにされがちなのもありますが、祈りを大切にするなら困難にも耐える力が与えられるでしょう。

＊その6＊ どんな行いにもよい結果と悪い結果があります。悪い結果だったとしても、反省の材料にはするにしても失望の種にすることはありません。常に反省と祈りをもって努力して生きる、これこそ信仰を生きる生き方です。

ほかにも沢山あります。山崎神父様の心を心としてこれからも歩みたいと思います。感謝！



追 憶

東原 秀夫

マリア様へのひたむきな信仰、
義に生き、苦を苦とせず、清貧に安んじ、
不言実行、厳しさと優しさ、
中和田教会と、信者一人ひとりを愛し、
祈りと読書に過ごされた20年。
山崎神父様、主のみもとで永遠の栄福に
御安息されますように。
アーメン。



NRC 旅行 — 盛岡 2002.05.24



NRC 旅行 — 四国 2001.05.25

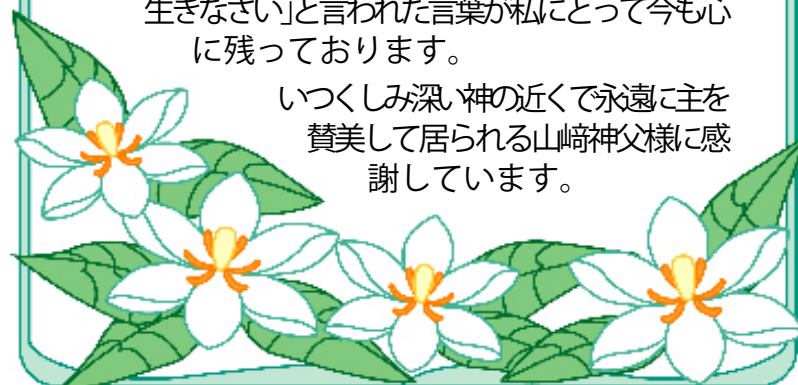
山崎神父様の思い出

位田 裕子

“金祝の日までは”と願っておられましたその日を待たず
帰天されました山崎神父様。ジーパン、一年中
素足、サンダルのお姿が思い出されます。

苦しみ人々を支えられ、ご自分のために清貧で
すごされました。カメラ、読書、相撲のお話になると食
事を忘れることが多くありました。急がず、あわてず、
のんびりと時を過ごされたのも神父様の健康がよかったと
思います。何度も入院され苦しい思いをされたときも
いつもおがやかには同室の患者さんとお話をされておられ
ました。私の苦しい時にも神父様「あるがままに
生きなさい」と言われた言葉が私にとって今も心
に残っております。

いつくしみ深い神の近くで永遠に主を
賛美して居られる山崎神父様に感
謝しています。



追悼・故ペトロ山崎正俊神父様

あの方のそこに私は惹かれます。だからいつまでも、いつまでも。

竹内 広治



JR 石川町駅から山手司教座教会までは、曲がりくねった、きつい坂道が続きます。

昨年1月、心筋症の疑いありと診断されました。いま衰えた胸の動悸にかすかな不安を感じながら、
道を選ぶようにそろそろと歩いております。教会へと続くこの辺り、頻りに訪れるエリアではありませんが、
このたび日時はそれぞれ違いましたが、2度にわたって難儀な坂道を往来いたすことになりました。

3月11日、その日一人の司祭が神に召されて告別葬儀ミサ。3月21日、その日一人の若者が神に選ばれ
て叙階式、司祭誕生。旬日を経ずして同じ聖堂にてふたつの祭儀が執り行われ、多くの列席者と共に招かれ、
見聞して、祈りを捧げられたことは真に光栄なことと思ひ、感激いたし、あたかも司祭の一生の始めと終
わりを垣間見た気がいたしました。

ふたつの祭儀を司式なさった梅村司教様のお話のなかで、山崎神父様について優しく追悼の言葉で労わ
れました。実社会の生活体験を経て、司祭願望を遂げるために、壮年に達してから神学校での勉強は大
層なご苦労がございましたか。当時必修科目のラテン語の修得には特に励まれたらしいとのことが伝説
のように残されているようです。一方、新司祭になられた山田神父様には、司祭としての心構えをお諭し
になり、司祭は交わりの中に生きる努力を続けるものと結ばれました。

山手教会でのふたつの祭儀に共通した、ある言葉を司教様は述べられました。「司祭は死ぬまで司祭であ
る」。それを聞いて、私はある一つの風景を思い浮かべました。それは、白神山地か、富士の樹海か、幻想
の中のシーンなのです。苔むした古木が倒れて、空洞が覗かれます。よく見ると、柔らかな光を一身に浴びて、
一本の新しい命の若木が萌え出でている姿です。人の生と死の象徴とも見えるのです。

山手教会で出身の方の司祭叙階は随分久しぶりのこと。教会挙げての祝典ムードの盛り上がり、羨
ましく眺め、中和田教会でもこのような喜びをいつか味わいたいものと思ひました。中和田で一粒会のお
仕事を続けさせて頂いたので、教会代表として司祭叙階式に参列を許され、天に通じる新司祭の真新しい
祝福を授かったお恵みを感謝し、満ち足りた心持であの坂道を下ります。時々息を整えるため一休み。空
を見上げると久しぶりの青空。一片の雲が流れていく様を見て、柄にもなく感傷的な気分になってしま
いました。

亡くなられた山崎神父様の霊魂は、この空の、あの雲のいずれかで休んでおられるのか。3月7日、神父様
の訃報が伝わりました。かねてから覚悟の中和田教会の信徒にはさほどの動揺はないものの、一抹の寂し
さは隠しようありません。私たち家族は、平成7年の秋に二俣川教会から転入、いま住んでいる家を「つ
いの棲家」と定め、これから教会と仲良くしようと思った矢先、思わぬ病気に責められ責められ時期を逸
しました。従って、神父様との交わりはそんなに深くはありませんでした。でも、第一印象はとても愉快。
たしかサロンの席で、あまり上等とは思えぬセーターを無造作に着ておられるのを見て、どこか田舎のお
じさんが迷い込んだかと人に尋ねたら、祭服を脱いだ神父様とか……。いやたまげたね。

1957年、山崎神父様が叙階された年。以来49年に亘る祈りと耐乏と慈愛の生活。神父様からもっとも
と年代を追ってのお話しが伺いたかったと思います。それは昭和の時代史と言えるから。

では、山崎神父様、そこは天国ですから車椅子から降りましょう。



堅信式にて 濱尾司教様と 1990.03.25



堅信式にて 梅村司教様と 2000.4.9



山崎神父様との思い出

中和田教会委員長 下村 毅

神父様との思い出を語るには、自分の話で恐縮ですが、ここから話させていただきます。

私は小学校5年の時に受洗しましたが、中学生になり教会から遠ざかっていました。

教会に戻れたのは、昭和62年9月に帰天した母「アンナ下村友子葬儀」のお陰でした。その年の春、自宅療養中に数名のご婦人方のご協力を得て、山崎神父様に、「家庭ミサ」を挙行していただきました。ジーパン姿でお越しいただいたことが印象的でした。

葬儀は自宅で行いました。その理由は「この家は、親父とおふくろが苦労して造った家なので、ここから送ってやりたい」と思い、山崎神父様に相談しましたら、快くお引き受けいただきました。日本間でしたので「司式にはご苦労された」と思います。

その時の導きにより、私は教会に足を運ぶようになり、妻も受洗いたしました。

教会に通うようになった日曜日は、7時のミサ（余り人が居ない）に与り、終了すれば逃げるように帰宅し、休日の残り時間を過ごしました。

神父様と私では、親子程の年齢差があります。我が家の（昭和38年に帰天した）父と私は、何か用事が有る時「一言話すだけ」で、親父との会話は非常に少ない家庭でした。

その原因は、「親父コンプレックスだ」と思いますが、山崎神父にも同じようにコンプレックスを感じ、私からは用事が無ければ「声を掛けたくない怖い存在」でした。

そして、神父様は病に犯され「テレジア病院」入院、教区別館の療養生活と続けました。

二年前、委員長をお引受けした時に教区別館を訪ね「私下村が、花坂委員長の後を引き受けました、神父様のご指導を今後ともお願いします」と話しますと、ニコッと表情を崩されました。私が右手を握り「宜しく」と言うと強く握り返されました。分かってくれたことが確認でき、私の涙腺が緩みしたので、お暇いたしました。

復活祭やバザーに「ご招待」する度に、車椅子でお越しいただきました。ある時は「帰りたくない」と里心が出たようですが、「喜んでいた」と介護の方々からお聞きし、信徒の皆様と共に「山崎神父様と心が通い、ホットし心温まる思い」がしました。

最後にお目に掛かったのは、昨年12月4日（日）教区別館で介護をされておられる「本田様」から、「ご本人が一番望まれている中和田教会で88歳の誕生祝をして貰いたい」との話が有り、介護の方と信徒の皆様のご協力をいただき「88歳（米寿）のお祝い」を20年居られた中和田教会でできましたことが、私の（委員長として）大きな思い出です。

山崎神父様、天国で諸聖人と共に、我々を導き、お救いください。



中和田教会での神父様誕生日会
2005. 12. 4

山崎神父様を偲ぶ

山中 嘉子

堇咲く いつも素足の 神父逝く

あの小さなすみれと山崎神父様。いちばん似合っているような気がする。清貧という現代からいちばん遠くにある言葉を地で行った神父様。

大変な読書家で、衣食は最低で書籍（キリスト教関係）を沢山お求めになり、何かと信者にくださる。結構高価な本も、たまたま居合わせただけに、勿体ないような気持ちのうちに頂く。

いつも父親のように見守る形で私たちにいろいろ気付かせてくださった。かけがえのない神父様だった。

今頃は、永遠の喜びの国に迎えられていらっしゃるだろう。感謝のうちに合掌。

山崎正俊神父様を偲んで

小谷 徳爾

山崎神父様の著書、今改めて「書棚」から出して、1982年12月21日発行・横浜小神学院での「あざみ乃」、1980年8月31日発行・「かしまだ抄」（中和田の前任地）、1997年12月21日発行・「なかわだ抄」、申すまでもなく1993年3月23日発行・「ひろまち抄（上）」（この最終頁に、ジュリア祭への巡礼に間に合わせたかったので、やむなく“前半だけ”になってしまいました・・・と）の4冊を読み返し、今更乍らほんとうにご立派なご聖職者であられたこと、また宮下禮造神父様を「恩人」といつも。

次に、癖は、神父様はお行儀が悪い・・・。「お鍋からいつも茶色の〈粉品〉を入れて召し上がるなんて・・・」「軍隊に行った者は飯盒（はんごう＝携帯用食器）で食することが忘れられないのです」「同感です」と申し上げました。

文章のことですが、楽しそうにペンをとられて、「なかわだ会報」に執筆される文章をいろいろ書かれますが、ややこしく解らない文章もあるのです。失礼乍ら「同い年」から“ぶしつけ・・・”

「神父様、私の遺言なんですよ」と。神父様はニコニコ・・・。

素足のままでスリッパをつっかけミサ司式・・・。「ご注意なさったら・・・」と、もう天国に行かれた大婦人から委員長だった頃の私に・・・。神父様にお伝えし



小谷家にて

たら「うんともすんとも」申されず・・・。後日談・・・。この大婦人を司祭室に招き、ダンボール一杯の何十足の新しい靴下を見せられ、「私は油足。綿の靴下でないとダメなのです。軍隊の靴下は全て綿でした」と・・・。

最後に私事を。「本人の意思で家内が洗礼を受ける勉強をしたいと言っています」と申し上げたら、山崎神父様は「ああそう」と。「年寄りには公教要理の勉強をこの本で・・・」と『イエスの物語』（メアリー・バチエラー・文、ジョン・ヘイサム・絵、阿部仲麻呂／佐久泉・訳のカラフルな絵本）や『四福音書』（イエズス様のご生涯をわかりやすく、聖書に忠実な取材、ドンボスコ社）を。家内は毎日読んでおりました。クリスマスに、代母を小野和江様にいただき、洗礼が叶えられました。小谷やすの、霊名はマリアです。





山崎神父の思い出

井上 昭男

山崎神父との思い出は、数十年要理学校を担当していましたので、いろいろな思い出がありますが、私の脳裏に浮かんだ事が二つありました。

その一) 山崎神父子供達を叱る

復活祭も近い四旬節のある日曜日、9時のミサ後要理学校の子供達に告解をさせるため、準備のお祈りと、神父様のお話がありました。

キリストの復活、告解の大切さを子供達に話しているときです。神父様の話が急に止まりました。子供達が真剣に話を聞いていなかったからです。

しばらくして神父様は一段と声を大きくして「神様の話が聞けないのであれば、お聖堂から出て行きなさい」と。子供達もいつもの神父様と今日は違うなと思ったのか、その後はじっと神父様の顔をみて話を聞いていました。いつもは何かあっても、穏やかな口調で話される神父様に、今日はどうして子供達を叱ったのですかと聞いてみると、神父様は「神様が私に神の話が聞けない子供達にバツを与えなさいと耳うちされたのですよ」と話されました。長い神父様とのお付き合いのなかで子供達を叱ったのは私の記憶ではこのとき一回だけだとおもいます。子供を叱る大人が少なくなったと言われる昨今ですが、叱ることの大切さを思い出しました。

その二) 台風の中悠然と

毎年2泊3日で教会及び周辺のキャンプ場で夏期学校をおこないました。

あるとき丹沢の某キャンプ場で夏期学校を行った時、ちょうど台風にあたり、行く前に神父様と要理担当者と何回となく打合せをした結果、台風の進路がずれる又進行が遅れているので、2泊を1泊に変更して決行しました。

当日天気は曇り空でしたが、1日目のスケジュールは予定通り出来ました。しかし夜半になってから雨がふりだし、風も強くなり、ラジオで台風状況を聞くと進行が早くなり明日の午後から風雨が強くなると言っていましたので、2日目のスケジュールは全て中止にし、早めにキャンプ場を出発できるようにしました。

翌日の朝はさらに風雨が強くなり、子供達を早めに起床させ早く教会に無事につれて帰りたいとの思いで、私たちが雨の中駆けずりまわっているとき、神父様は悠然と「なぜそんなに急ぐのですか」と場違いなことを言われるので、私たちは「いまの現状が判りませんか」と強い口調で言いますと、神父様は「キリストがガリレヤ湖の嵐を鎮めて弟子達を無事に渡らせたのとおなじで、私達も神が見守っていてくださるので絶対無事に教会へ帰れます」と力強い言葉で言われました。

私は「ミサは教会に帰ってからやりましょう」と言いますと、神父様は「いやここでやりましょう。このような状況であるからこそ皆で心をひとつにしてお祈りすれば神様は私達を無事に教会まで導いてくださいます」。

風雨の強くなる中ミサを行いました、全員の心がひとつになったすばらしいミサになりました。神父様の神への信頼する心にふれて感動した事をいまでも思い出します。

無事に一人の怪我人もなく教会にもどれた事を今思いだすと、台風が近づき風雨の強くなってきている中で神父様の悠然とした態度が、私達にも、子供達にも安心感をもたせ、元気で帰ってこれたのではないかと思います。

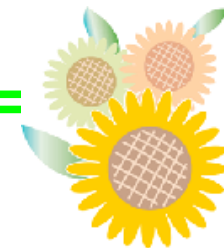


山崎神父はいつも「子供達にたのしい思い出を作ってください」と要理を担当する私達に言っていました。神父様は要理学校の遠足、夏期学校等どこへいくにもかならず都合をつけて、カメラをぶら下げて参加してくださり、子供達に多くのたのしい思い出を作ってくださいました。昨年の12月に中和田教会にこられ、子供達の聖劇をみてもらいましたが、笑顔の神父様を忘れることが出来ません。聖劇をみてもらい、本当によかったとおもいます。

帰天された山崎神父様これからも私達を見守り、お導きくださいますようお祈り申しあげます。



子供達と一緒に 1997年



敬老の日に 1995. 9. 10



完ぺきはダメです

七浦 鑑吉

夏の強い陽ざしの下、庭の草取りもと少しで終わりかけていた。夢中だったせいか、そばに神父様が立っておられるのに気がつかなかった。私は内心雑草のないきれいな庭を見られて神父様からねぎらいの言葉でも・・・とそんな気持ちでいたのかもしれない。ところが、「完ぺきはダメです」と言う神父様の声が聞こえた。「ええ?」と思いながら残り急いでいたので「どうしてですか?」と言う問いかけもしなかった。神父様は小声で何か言っておられたが、草をとることに夢中だった私にはよく聞きとれなかった。「雑草の中にも小さな虫たちが自分の住み家として生きている。彼たちの住み家がなくなってしまう。虫たちのために少し残しておかなくてはいけない・・・」そのような言葉を言っておられたのだと思い出す。

庭がきれいになり気持ちよくなる。しかしそれは我々人間の考えであり、あの雑草の中にも小さな弱い虫たちが生きている場所があるのだ。そのような思いなど一つも頭になく只自分が行っている行為がすべて正しいと思っていた自分の考え、余りにも身勝手な傲慢な人間様の考えなのだろう。

弱い命を持った虫たちの住み家がそこにあるという感性を持ち合わせていなかった。たとえそれが虫けらたちとはいえ、神様からいただいたお互いの“命”と言うものを悲しくも忘れてしまっていたとは・・・。

虫たちも思っていたのかもしれない。夏の夜など神父様が涼をもとめて庭に出られると彼たちも喜んできれいな声で鳴き出すかもしれないもし我々がバタバタと足音を立てて外に出るとびっくりして逃げ出すかもしれない。

生きものにはすべて心と言うものがある、相手の痛みや苦しみをわかってやる心を持ち合わせること、一番大切な神様の教えと言うものを言っておられたような気がする。

「完ぺきはダメです」と言われたあの時の神父様の言葉が今も私の心の中に強い衝撃として残っているのを思い出される。